

書評

武智 秀夫・明石 謙 著

義 肢

大川 嗣雄 (横浜市立大学医学部リハビリテーション科)

我が国に近・現代的なリハビリテーションという思想や技術が導入されてからすでに4半世紀を過ぎようとしている。特にその前半、1950～1960年代にかけては蘭学事始めではないが、その知識の大半を外国の文献に頼らざるをえない時代であった。しかし、そのような状況の中でも、日本語で書かれた珠玉のような名著がいくつかあった。この本の著者の書かれた『義足』(1968年)、『義手』(1972年)もそれらの名著の一つであった。今回、その名著が『義肢』として装いも新たに出版された。

その内容は、単に2つの本を一つにしたというのではなく、まさに新たな義肢という本が生まれた感じである。構成は総論、義手、上肢切断のリハビリテーション、義足、下肢切断のリハビリテーションの5章からなっている。

総論では、義肢の歴史に始まり、各部の切断について述べられ、さらに断端の合併症、切断者の心理的問題、切断者とリハビリテーションという章に続いている。

第2章の義手では、上肢切断の運動学から義手の分類へと続き、装飾義手から体外力源の義手のすべてに至るまでが詳述されている。さらに第3章で上肢切断者のリハビリテーションが、各々の義手ごとに述べられている。その内容は、装着訓練から応用動作の訓練に至るまでが述べられており、大変実際の臨床に活用できる章である。また、この章は義

手の適合判定、処方と続いており、上肢切断のリハビリテーションのすべてが盛り込まれている。

第4章、第5章は義足と下肢切断のリハビリテーションであるが、下肢切断者のリハビリテーションに必要な情報はすべてこれらの章から得られると思われる。最近では骨格構造義足の進歩によりソケットをはじめ継手部品にも多くの種類が登場し、その選択に迷うことがしばしばであるが、これらの問題にもよく整理された回答が用意されている。

いずれにしても、著者らも述べているように、古典的理論(現在の義肢でもこの理解は重要である)から現代のハイテクノロジーまで述べられており、リハビリテーションに関係する人々に一度はじっくりと読んでもらいたい本であるが、いざというときに関係する章を紐解けばすべての回答が得られるという本でもある。著者らの労に感謝したい。

最後に、敢えて希望を述べさせていただければ、我が国の義肢に関係する法体系について触れてほしかったと思うことと、図や写真が大変きれいなものこの本の特色の一つであるが、写真がいずれもハイトーンに統一されていて非常に見やすい反面、ソケットの質感などの表現が失われているのが残念である。

いずれにしても、すべてのリハビリテーション関係者の書棚に備えていただきたい本である。

(B5判 302頁 9,991円(税込) 1991年 医学書院刊)